

TAKE FREE

MOVE

心が動くまちKOIWA



MOVEは、小岩の暮らしがもっと楽しくなる情報をお届けするフリーペーパーです。

2023 # 003

ワタシ and コイワ

003

TOKUMASA FUNAKI

西小岩六軒島町会 会長 船木 德政さん

小岩のまちにお祭りが、お神輿が戻ってきた！コロナ禍のために開催を見合わせていた小岩神社例大祭が2023年8月19日(土)・20日(日)開催され、勇壮なお神輿が小岩のまちを練り歩きました。今日は、小岩神輿連合を構成する西小岩六軒島町会の会長であり、神輿同好会「六軒睡」の代表を務める船木徳政さんに、お祭りへの思いを伺いました。

実に5年ぶりの小岩神社例大祭となりました。

今年はやっぱりすごかったです。良かった。前の例大祭は平成30年ですから、令和初の開催と言えるわけです。自粛期間中は、子どもたちにも楽しみがないし大人たちも家の中に引っ込んでるし…私たちみたいな人間にとっては大変な時代でしたね。



まあ私たち、令和3年と4年に2回、生まれは北九州の小倉です。故郷には「小倉祇園祭」というお祭りがありました。神輿じゃなくて、大きな山車が出るんです。特に太鼓が有名で、私も小学校のころやつていましたよ。土曜の練習に参加すると学校に行かなくてよかったから笑。そのころから地域に根差した「祭り」というものが好きでしたね。

そもそも、船木さんはどのようにお神輿と出会ったのですか？

私は小岩の人間ではなくて、生まれは北九州の小倉です。故郷には「小倉祇園祭」というお祭りがあります。子どもたちはこんな風に育っていますよ」ということを伝えられるようなお祭りをしていくたいんです。

そもそもお祭りが盛んでしたか？

私は小岩の人間ではなくて、生まれは北九州の小倉です。故郷には「小倉祇園祭」というお祭りがあります。子どもたちはこんな風に育っていますよ」ということを伝えられるようなお祭りをしていくたいんです。

他の地域はわからないけれど、私が引っ越して来た当時の六軒島町会では、町内の活動自体がそんなことありました。

そもそも、船木さんはどのようにお神輿と



「大人が楽しむ姿を見て子どもも祭りが好きになる。祭りの楽しさと伝統を伝えていきたい。」



船木さんの豆知識

お祭り・お神輿ってそもそも何？

輿というのは昔の乗り物。神様が乗るからお神輿といいます。いつもは神社にいる神様の御靈をお神輿に乗せて氏子町内を練り歩き、家内安全や無病息災を願います。だからお神輿は神聖なもの。上に乗ったりするのはタブーです。



お祭りにおける半纏（はんてん）とは？

半纏は祭りにおける正装。半纏を着ていないと神輿が担げないというルールがあります。地域や団体の名前が染め抜かれているのだから、半纏は大切に扱わないといけない。座る時も尻の下に敷いたりしゃだめですよ。



お神輿の掛け声は？

深川八幡宮の「ワッショイ ワッショイ」が有名です。これは、「和を一緒に背負う（しよう）」から来ていると言われています。浅草三社祭や神田明神は「セイヤ、セイヤ」の掛け声で担いでいます。



地域によって担ぎ方って違う？

江戸前の神輿は、神輿が進む向きに平行に担ぎ棒が付いていて、担ぎ手は皆前を向いて進みます。変わっているのは、品川や五反田の「城南担ぎ」。横棒が長くて、担ぎ手はそれを肩に乗せて飲ちゃん歩きのように横に動きます。



担ぎやすい肩はありますか？

右利き左利きがあるように、肩にも「強い肩と弱い肩」があります。私は右利きだけれど、左の肩が強い。その方が担ぎやすいというか、棒を肩に乗せたときには重く感じるんです。



担ぎ方のコツを教えてください！

お神輿は上下するから、普通に歩いていいだけだとゴツゴツ当たって肩が痛くなってしまう。私たちは「腰を切る」って言うんだけど、腰で担いで体を棒に合わせていくのがコツ。まわりの人に「教えて」って聞くのがいちばんてつり早いかな。



KOIWA ジャーニー

東南アジア

タイ古式マッサージなどで多くのタイ人が働く小岩は、レストランも本格的！
今回のジャーニーは東南アジアをテーマに、タイ料理店とベトナム料理店を紹介します。さあ、KOIWAを旅してみよう！



居酒屋風店内でいただく
ホテル仕様の本格タイ料理

現地のホテル出身シェフが作る洗練された料理。美しい食器はオーナー自慢のコレクション。しっとり柔らかいカオマンガイに、まろやかな味わいの蟹カレー。調理の様子を覗くのはタイ料理店では珍しいこと。夕方から販売するティーカウト用のタイカレーは、ビニール袋に入れた素朴なスタイルが現地風。



タイ料理居酒屋 バンコク ザップ

料理の辛さは調整可能 ●江戸川区
南小岩7-25-14 丸昌地蔵ビル1F
●17:00~24:00 ●水曜休

1 カオマンガイ 1,000円
2 蟹カレー(ブーリー・カリー) 1,000円



※価格は全て税込です。



本場のイサーン料理
「おばあちゃんの味」を楽しむ

ソムタムやラープなどが有名なタイ東北部イサーン地方の料理が満喫できる。サイコーヨーイサーンはイサーン風ソーセージ。ほろほろとした食感とほのかな酸味がおもしろい。モチモチした米粉の太麺を炒めたパッソイウは甘めの味付けがくせになりそう。店名のクンヤイはタイ語でおばあちゃんの意味。



気分はベトナム旅行！
初めての料理にも挑戦したくなる

にぎやかな外装、内装が東南アジアらしい店。ランチにも人気のフォーは、コクのあるスープにほんのりピンクの牛肉が柔らかい。あっさりしていて弾力ある食感がおいしいローストダックは、ベトナムではお祝いに食べるという。ココナツミルクにゼリーやフルーツを合わせたチーはデザートに。



7

タイ料理とカラオケ クンヤイ

タイ食材や生活雑貨も販売している
●江戸川区西小岩1-22-8 JS IIビル2F
●03-5876-7073 ●11:30~14:30/
17:00~23:30 ●不定休



3 サイコーヨーイサーン 1,200円
4 パッソイウ 1,200円



ベトナム料理専門店 DE NHAT QUAN

2・3階にはベトナム人向けの美容院やカラオケが入る ●江戸川区西小岩5-1-22
●03-6770-0708 ●10:00~22:00 (月~金)
10:00~23:00 (土・日曜、祝日) ●不定休

5 牛肉のフォー 979円
6 チー各種 869円
7 ローストダック 2,178円

古今東西南北小岩

江戸川区が「水とみどりのネットワーク」づくりの一環として設けている親水緑道。緑を感じ、水のせせらぎを聞きながらお散歩してみませんか？今回は小岩エリアの親水緑道をご紹介します。

南小岩

下小岩親水緑道



©Edogawa

南小岩7丁目の住宅街から、千葉街道の1本北側を南西に通り新中川に抜ける下小岩親水緑道。この一帯は明治の初めまで農業が盛んだった。かつて農業用に開かれた用水路は、その後都市化に従い排水路として利用されてきたが、下水道の整備によって役目を終え、江戸川区最初の親水緑道として整備された。豊かな田園風景が広がっていた頃を想像しながら歩くのも楽しい。

また、緑道には彫刻家 浜田彌三氏による彫刻が11基設置されている。子どもやピエロがモチーフとなっていて、いきいきとした動きや楽しげな表情にも注目したい。

北小岩

上小岩親水緑道



©Edogawa

京成線の線路沿いから、北小岩の閑静な住宅街を北上して江戸川に抜ける上小岩親水緑道。四季折々の植栽が私たちの目を楽しませてくれる。この緑道が通る北小岩6丁目・7丁目には、弥生時代後期から古墳時代、近世(室町時代)までの史跡が見つかる複合遺跡「上小岩遺跡」がある。緑道内にも遺跡のモニュメントや土器が描かれたマンホールが点在しているのがおもしろい。

この遺跡が発見されたのは昭和27年。小岩第三中学校の生徒が自宅裏の用水路から土器片を見つけ、先生に知らせたことがきっかけだった。以降発掘調査が行われているが、2020年上小岩小学校の改築に伴い学校敷地内で発掘が開始され、今もその様子を見ることができる。

ちなみに、東大寺正倉院に残る奈良時代(721年)の戸籍に「甲和里(こうわのさと)」という里が記録されており、これが現在の「小岩」の地名に転化したと言われている。弥生時代や奈良時代の人々もここでくらしていたという歴史のロマンを感じながら歩いてみてはいかがだろうか。



珈琲 木の実

江戸川区西小岩 1-20-20
03-3657-5669
9:00～17:00 (月～金)
9:00～18:00 (土・日曜、祝日)
年末年始休



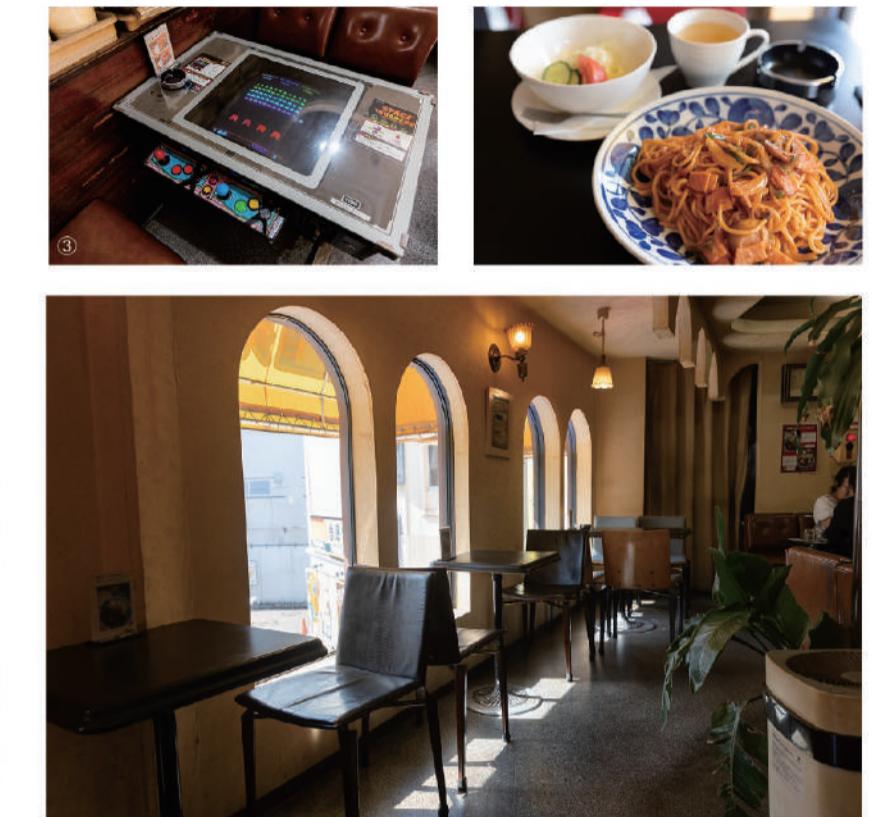
喫茶 白鳥

江戸川区南小岩 7-26-2
03-3673-9325
8:00～19:00
月曜定休



cafe 小岩俱楽部

江戸川区南小岩 5-21-14
メゾンパンカッセル 102
03-3673-3193
11:30～22:00
月・火曜定休



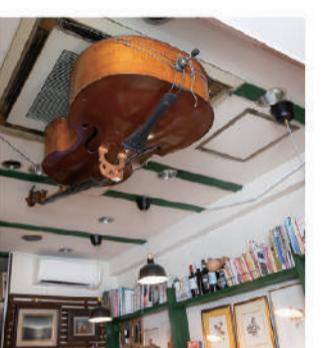
profile 家森 健(いえもりつよし)

広島出身の行政書士。13年前から小岩在住。散歩途中で出会った景色をスマートフォンで撮影するのが趣味。2021年小岩レトロフォトコンテストで「小岩デラックス賞」を受賞し書籍「ラブユー小岩レトロ」で撮影を担当。71歳。



小岩でくらす人の数だけ小岩の歩き方がある。

小岩のまちと一緒に歩き、その目に映る風景や心に浮かぶ思いを聞きました。



落ち着いた時間を楽しむ「cafe 小岩俱楽部」

次に訪れたのは千葉街道沿いの「cafe 小岩俱楽部」。店内の壁一面にカップや茶器、調理器具、さまざまなジャンルの本などが飾られ圧倒される。見上げた天井にはウッドベースまで！なぜ飾っているのか尋ねるとそれぞれにストーリーがあり、マスター竹村友義さんの経歴や歩んできた道が形になったような店だ。この喫茶店はマスターの奥様の実家である老舗洋菓子店「バンカッセル」とひと続きになっていて、同店のケーキや焼き菓子が店内でいただける。マスター手作りの本格的なパスタやピザも、コーヒー同様人気が高い。

「うちの店は比較的女性客が多くて、背中の曲がったおばあちゃんが娘さんに連れられて来てくれるの。おしゃれしてね」と、竹村さん。家族ぐるみの温かさに居心地の良さを感じるのかもしれない。新規のお客さんも増えていくそうだ。

家森さんに、小岩になじんだ経緒を聞いてみた。「気兼ねなく話せる店ができることは大事だよね。私もなじみの飲食店をきっかけに小岩と繋がりができるようになった。フランチャードのサンサール（ネバール料理店）もそのひとつ。ショッピングセンターで通っていたら、店主のウルミラさんが話しかけて仲良くなつた。実はこの店を教えてくれたものウルミラなんだよ」と、竹村さん。ウルミラさん、家森さんの3人は、今一緒にジャズライブに出かける友人関係だという。

「習い事もいいじゃない。私は「ミニニティ会館で詩吟と仄八を習っているからね。そのうちこの店で演奏するから」と言う家森さんに、「歯がなくなつたら仄八も吹けないよ」と茶化す竹村さん。店内に流れる重厚なジャズを聞き消すように、二人の笑い声が響いた。

立ち退くことが決まっている。

「今年の3月に母が亡くなるまでは、母と私、息子2人の3代で一緒にお店をやってきました。47年前にこの店を始めたときにはすでに都市開発の話があったから（立ち退きは）ようやくかという感じですよ。移転は考えてない。この場所だからやつてこれたけど、駅から離れたりビルに入ったりすると個人店は難しいです。急な階段を、杖ついて通ってくれる常連さんもいるからもちろん寂しい。だから、私がこの店をしっかり見届けたいと思っています。最後まで頑張りますよ。」

レトロ&キュートで再び目立つ「Kōcha Shiratori」

次に案内してもらったのは「喫茶 白鳥」。小岩駅南口のロータリーを見下ろす2階の店だ。看板に描かれた2羽の白鳥が、まるでハートを形作るように向かい合っている。食品サンプルのショーケースは見てるだけで楽しい。ナポリタンやピラフは昔から変わらないレシピだし、生姜焼きのタレも自家製。クリームあんみつの寒天も自分で作っているね」と胸を張る。昭和51年の開店以来多くの常連客に愛され、また最近は若い人たちも「エモい」と家森さん。指をさした先には山積みの雑誌が。「ああいうのも最近のカフェにはないで」と、店内の隅に埃がたまつたり。山本さんの言葉に「変わらぬ」ということでも大変だと気づかされた。

その思いは喫茶店の本分であるコーヒーにも。「豆にはこだわっています。アイスコーヒーは手抜く店もあるみたいだけれど、うちは落としてを冷やしますからね。ぜひ試してみて」。銀のボットから自分で注ぐアイスコーヒー。マスターおすすめのモカフレンチは、苦みの中ほのかな甘さを感じる逸品だ。

小岩駅から徒歩2分の「珈琲木の実」は、山小屋のような青い三角の屋根が特徴の名店だ。昭和30年にフランチャードで開業した。開店当初、小岩には2軒しか喫茶店がなかったが、現在の場所に引っ越しした昭和39年は空前の喫茶店ブーム。小岩駅北口だけで80件以上も喫茶店があったといいうから驚きだ。

「もちろん流行りのカフェで仕事をすることもありますよ。でも、昔ながらの喫茶店ではパソコンを開こうなんて思わない。喫茶店はくつろぐために行く場所。マスターとおしゃべりしたり、新聞や雑誌をゆっくり読んだり。いつ行っても同じマスターがいるという安心感もチエーン店のカフェとは違うよね。」

そんな話をしながら歩いていると、かわいらしい「珈琲」の看板が見えてきた。小岩界隈の喫茶店では老舗中の老舗、「珈琲木の実」だ。

わたしの小岩歩き方 TSUYOSHI IEMORI

小岩の喫茶店ブームを牽引した「珈琲 木の実」

「ことなくノスタルジックな小岩のまち。その風情に一役買っているのは、そこここに点在する喫茶店ではないだろうか。昔ながらの看板を掲げ、昭和の時代から何ひとつ変わっていないかのように風景に溶け込む喫茶店。そんな小岩の喫茶店を愛する家森健さんと一緒に、小岩のまちを歩いてみた。

「もちろん流行りのカフェで仕事をすることもありますよ。でも、昔ながらの喫茶店ではパソコンを開こうなんて思わない。喫茶店はくつろぐために行く場所。マスターとおしゃべりしたり、新聞や雑誌をゆっくり読んだり。いつ行っても同じマスターがいるという安心感もチエーン店のカフェとは違うよね。」

そんな話をしながら歩いていると、かわいらしい「珈琲」の看板が見えてきた。小岩界隈の喫茶店では老舗中の老舗、「珈琲木の実」だ。

